

南部くまこ・作
高嶋ひろみ・絵



LOVELLY!
愛しのまめっち



LOVELLY!

〜愛しそのままっち



ビシイ！

あたしのミラクルアタックが、
相手コートに突き刺さった。

「キヤアアアアアアーーーーーー」
「ーーーーー！！！！！！」

「羽野^{はの}さあーーーーん！！！！！！」
「こっち向いてえ！！！！！！」

ほとんど悲鳴のような大歓声が、
あたしをつつむ。あたしは笑顔
で手をふって応^{こた}える。さらに大
きな歓声が校庭に響きわたった。



「羽野さあーーーーん!!!!!!」

「ひかる先輩ーーーー!!!!!!」

「ひかるさあーーーーん!!!!!!」

本日、春の校内バレー大会。

かつこよく試合終了。

もちろん、うちのクラスが優勝。

ふふん、ま、こんなもんよ。

あたしはたちまち女の子たちに
取り囲まれた。

「羽野さん、お疲れさま☆」

「タオル使ってくださあい♪」

「飲み物、買ってきたよ☆」

「はちレモつくってきましたあ」

うーん、こういうの、やっぱり悪い気はしないよね。

まあまあキミたち、順番に……

「ねえ、ちよつと、ひかる……」

チームメイトがあたしを肘ひじでつ
ついて、薄気味悪うすきみそうに体育館
の扉とびらのほうを指さした。

「……あれ、何？」



「ま、まめっち!!!」

な、なんでここににいるのっ!?

あたしに気づかれたまめっちは、
三角巾さんかくきんにかっぼう着、黒いサン
グラスというロツクな格好かつこうで、
すたこらさっさと逃げ出した。

おばちゃんみたいなサンダル履ば
きなのに、すげえスピード!

「なに、あれ……？」

「てゆうか、何あのカツコ……」

体育館の空気が凍こりつく。

チームメイトが怪訝けげんそうに訊きいた。

「ひかるの知り合い……？」

「いや、えーと……」

ははは……

まあ、知り合いつていうか、
腐れ縁くさ えんつていうか……

いちおう幼おんななじみつていうか、
ねえ……？

大会からの帰り道、あたしは家のすぐそばにある、ちいさなお弁当屋さん^{さん}に立ち寄った。

カウンターから、ひよいと中を覗^{のぞ}き込む。

おっ、いたいた……！

「おーい、まめっち」



菜箸さいばしを手にした彼女が、くるつと振り返った。三角巾にかっぽう着だが、さすがにサングラスはしていない。

「おーす！」

少々照れつつ、かっこつけて、カウンターにもたれかかった。へへ、来てやったぜ、って感じ！

だけどまめっちは、あたしの姿を認めると、またプイツと横を向いてしまった。

「まめっち？」

「……」

「まめっち？」

「……」

「まめっちゃん？」

案あんの定じょう、彼女彼女はすっかり拗すねて
るらしい。まったくあたしのは
うを見てくれない。

おかげでカウンターの前で百面ひやくめん
相そう。聞こえてくるのはコロツケ
を揚あげる音だけ。

じゅわじゅわじゅわじゅわ。

あたしは、わざとらしくため息をつき、キメの一声をかけた。

「……仕事終わったら、ウチに遊びにきな」

くるつと振り返った彼女が、盛大にアツカンベーをしてみせた。

「……やだよーだー！」

フン、そんなこと言っただって、
結局、遊びに来るくせにさ。

てか、コイツ、いちいち、

やることがウザいんだっての！

あたしは、羽野ひかる。

お嬢様じょうさま学校でもなけりや偏差値へんさち
がいいわけでもない、平凡な、
私立女子高の二年生。



そして彼女は同い年の幼なじみ、
まめっち。

家業のお弁当屋さんを切り盛り
する孝行娘。



本当は、「豆まめノ木のき 萌もえ」なんて、
かわいらしい名前なんだけど、

だれも彼女を「萌」なんて呼ば
ない。

「どーして、〃まめつち〃になっ
ちやつたんだろ？ やんなつち
やうなあ、もう！」

彼女は毎晩のように、

あたしの部屋に遊びに来る。

コバンザメみたたく、いつも

あたしにくっついてまわって

あたしのファンクラブの会長だ、

なんて言うけれど……

「なに拗すねてんの」

「別に」

出たっ、「別に」！

やっぱチヨー拗ねてんじゃない。

なんだかなあ、もお。

「……………やな予感がしたのよ、

バレエ大会なんて」

「へ？」

「楽しそうだったね」

「そりやまあ」

困って、ほっぺをぽりぽり搔^かく。

「手なんてふっちやつてさ……」

「そりや、応援してくれるんだ
もん」

「鼻の下のばしちやつてさ……」

「の、のばしてないよ」

「……もお、ヤダ。ひくたん、
なんでそんなに女の子にモテる
のよう！」

あーもー。

ウザいっつーか、なんかさー。

イラツとききて、

あたしは髪をガリガリした。

こんな激しくヤキモチなんぞ
妬やいてるが、まめっちは断じて、
あたしの恋人とかではない。

ただのトモダチ。
幼なじみ。

……でもさ。

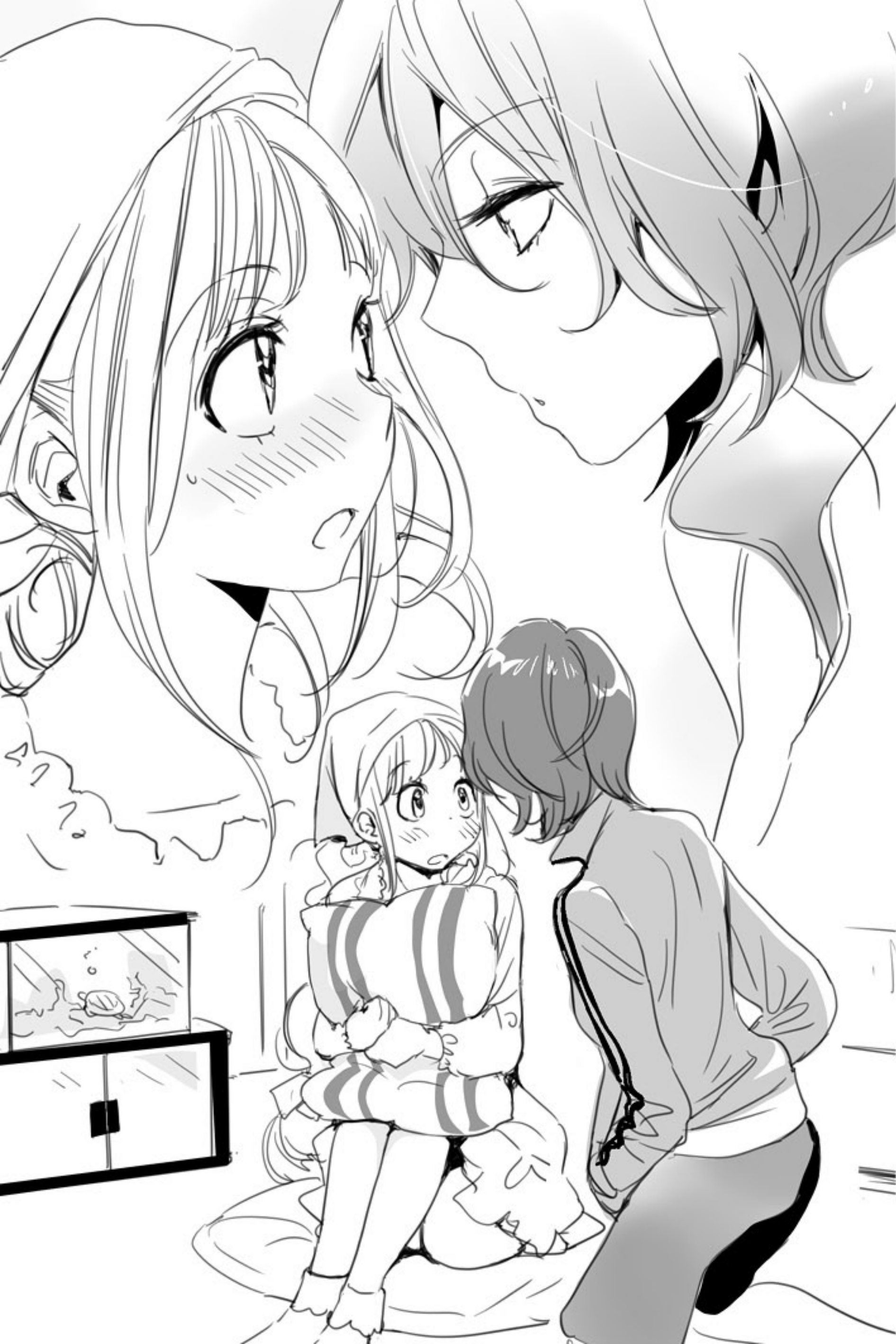
ずいっとまめつちににじり寄ると、彼女の顔にあきらかに動揺が走った。

「な、なによ……」

「別に……」

あたしはわざと目を細めると、ちよこつと顔を傾けて鼻先をスウツと彼女の顔に寄せた。

そう、まるでキスするみたいに。



「ちよ……ちよっど！ やめて
よ、変態！」

まめつちは、真^まつ赤^かになつてあ
たしを思いきり突き飛ばすと、
ピヤーツと走つて帰つていつて
しまつた。

……ふん、なにがファンだよ。
口ほどにもないヤツめ。

「……………変態で悪かったな。
ぶわーーーーーか!!!」

永遠に続きそつな
友達以上、恋人未満。



だけど、あたしたちはもう
子どもじゃない。

17歳。

いろいろ微妙びみょうなお年頃……

「ははっ、
アンタも気の毒な女
だね」



なんて、あたしを誘惑してくる
クラスメイト、和栗沙耶。
和栗沙耶。

でも、彼女も、
同じ悩みを抱かかえてるんだ。

そう、よりによって
一番仲のいい女友達に……



我が校のアイドル、春風はるかぜ舞まい。

沙耶と舞、ふたり並んで歩いて
りや、道ゆく男子が振り返る。

でも、あたしは気づいた。

舞にべたべたさされるたびに、一
瞬、不自然に強こわばる沙耶の笑顔。

はたから見れば、沙耶は引いて
るみたいに見えるだろう。

だけど、本当は怯おびえてるんだ。

女の子特有のべたべたした関係
やじゃれあいつてのは、あたし
たちには危険な罠わなだから……

「……あいつら、無邪むじや気きすぎいな
んだよな」

「……んつとに、こっちの気も
知らないでさあ」

どうしても口に出せない想^{おも}い。

嫌われたくない。

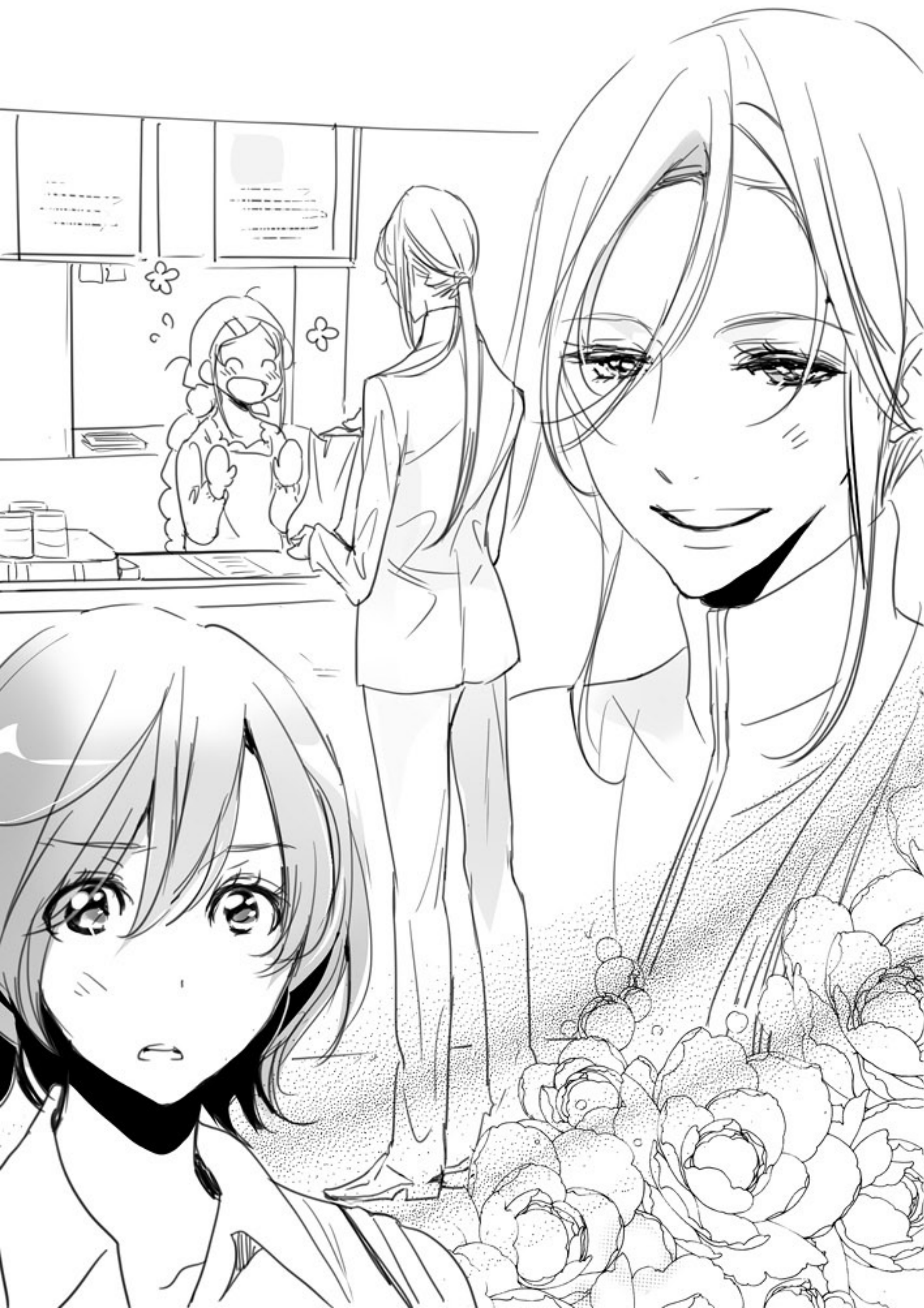
友情を壊したくない。



あなたの気持ちを知りたい。



あなたに近づいてくる
オトコが現われる前に……



「どしたの、ひくたん。怖いカオして」

「……なんでもないよ」

あたしはため息をついて、がぶつとコロツケに齧^{かじ}りついた。

「うまい」

「ほんとおく？　もうわたしの
コロッケ、飽あきたでしよ？」

「いや、うまいうまい」

まめつちが、めちやくちやうれ
しそーに笑った。



どうなる!?
切ない恋の行方。

『くちざ囁きのキス〜Read my lips.』
のなんふ南部くまじゅ

『あさがおとかせ加瀬さん』の
たかしま高嶋ひろみがおく贈る、

とびきりもどかしくて
ラブリーな初恋ガールズラブ！

『LOVELY! ～愛しのまめっち』

南部くまこ／作
高嶋ひろみ／絵

©2015 南部くまこ / 高嶋ひろみ
©parsola inc.